

追悼

偉大なる精神家・大澤俊夫先生

みずの
水野 治太郎
たろう

大澤俊夫先生は、私の人生の中で最も長く教え導いていただいた人生の教師です。その意味は、二つあります。一つは、ただ教えを受けた師というのではないのです。人間として先生の一生を通じて、あるいはそのご人格の表裏合わせて否応なく手本として導かれたことが多々あるからです。

もう一つは、学問への情熱、ことに我々共通の師である廣池千九郎学への大澤先生のひたむきな至誠という意味においてです。単純にいえば求道の精神ともいえませんが、そこで言う廣池千九郎学とは、その完成品ともいえるモラロジというよりも、むしろ人間廣池千九郎の生き様すべてを包含した全体性を意味します。それは時には「専門なき精神家」と揶揄されることもあり、時には、専門を越える「教養的精神家」と評価の対象ともなるのですが、大澤先生自身は、そういう言葉に直面すると、正直に自己を恥じてもおられましたが、しかし時には、ひそかに誇りにもされていたという意味もあります。私は先生の、そうした両面を合わせもつ点に、人間としてつよく影響されたといえます。

先生はつねに、一つの専門人とはいえないご自身に、恥じながらも自己に自信をもつ、そうした二つの

面、相互には矛盾するものの中で生きておられたように考えます。専門家以上に鋭い現実直視の眼をもちながら、時には人間的な温情をもって物事に接されました。それには言葉で言い尽くされない、ほとんど呑み込まれんばかりの、深い敬愛の情をもっていました。まさしく先生は偉大なる精神家であるといえます。

人生の教師としての先生は、人間関係に細心の注意を払い、人生の先輩には大変に気を使う面を多々みせてもらいました。また、将来性を見込まれた教え子には、過干渉と思えるほどの神経を使われました。先生の導きで、私は、時には自信過剰になったり、時には自信喪失して干渉されることを嫌ったこともありましたが。若いときは、真夜中に電話で注意されたり、明け方に寝起きを起されたりで、正直、自分の人生の意味を見失うような気持ちになったこともありました。先生に導かれた多くの人々がそう感じたのではないかと想像されます。

そのような関りの中で、思い起されるのは、家庭人として先生が挫折し、それを乗り越えて再出発されるという出来事です。私のみるところでは、それは生涯最大の危機であり、誠実に対処されたがゆえに、新しい人生へと回生することができたように考えます。私は、人間の弱さをまじまじと見せてもらい、そこに先生自身が人生の真実に直面されたのだと理解しています。廣池学やモラロジーの真価に、先生がからだを張って直接向き合われたのもその時であったといえるでしょう。少なくとも、そのことが重要な契機となっていると思われます。

少し具体的なことを述べることにしましょう。あるとき、ホテルの一室において、廣池千英先生と内田智雄先生それに大澤先生が編集責任者として、対談が行われました。他にも先生がおられました、その名前

は伏せておきましょう。私はただ一人の事務スタッフで、テープを回していました。

その時、話題が、専門学を放棄して人間に関する総合学、先に使った用語を再び使えば、偉大なる「精神の学」に志しをもつに至った廣池千九郎先生の心の軌跡に話が及びました。それは内田先生が問題提起されたように記憶しています。その時、大澤先生は、はじめて一つの仮説を述べられたのです。その内容は、奇しくも本年春に、筆者自身が出版した『経国済民の学——日本のモラルサイエンス研究ノート』（麗澤大学出版会）の中心テーマであり、少しそれを論理的に再論させてもらった主題でした。

簡略に言えば、廣池千九郎が大正四年に刊行した『伊勢神宮と我国体』の巻頭論文「神宮中心国体論」の内容に関してです。それは廣池千九郎自身の精神史のうえでも、最も深い意味をもつ「慈悲寛大自己反省」の精神原理の公表でありました。そして大澤先生が、ほとんど突然にこのことに重要な意味を見出し、それを投げかけたのです。廣池博士自身が人生で最大の喪失体験（信賴する団体に一身を投じて、身をもって助言したことが予想外の反響があり、その動きに反感をもった一部の人による悪意の排斥運動）に遭遇して、はじめて世界諸聖人の精神作用に深く感化をうけられ、博士ご自身が真に覚醒されたその精神史上の重大事でした。

そこに目を留められた大澤先生もまた、ご自身の人生において、大きな岐路に直面されていました。その時、大澤先生を厳しく批判された方もいました。先生ご自身も学園を退職する覚悟ができていたと後に聞かされました。しかし廣池千英先生は決してそれをお許しにはならず、そのために大澤先生は一人言い訳の出来ない孤独の道を歩まれました。

そんな折、私の伯父・松浦香氏（当時は常務理事在職中）から私は呼び出されました。大澤先生が直面し

ておられることを確かめられました。私は苦悩する先生のお立場を考え、ありのままの事実を述べました。すると、「実は正面から批判する人がおり、困っていたんだ。だがな、非難する人が将来本当に立派な人になるか、批判されるなかを低い心でコツコツと勤められる人が運命を開かれて立派な人間に生まれ変わるか、それは判らない。だから尊敬心をもってどこまでも随ってゆきなさい」と指導されました。私はその時はじめてと喋っていいほど、モラロジーの人心救済の精神を教えてもらったように思います。

それから、ご自宅で一人ぽつんと暮らしている先生を裏庭の木戸から訪ね、伯父からの暖かなメッセージを伝えました。すると先生は、「やはり昔の先輩は苦勞され、人間が磨かれていてほんとうに偉いんだな」と感涙されておられました。その時の先生の胸中を思うと、今でも涙がでる思いがあります。と同時に、廣池千英先生の人を育てようとする暖かな思い、人をどこまでも救ってやろうとするご至誠を痛感しました。

数年経過して、先生は実に暖かなお人柄を備えられた奥さまと再婚されました。その時は、心の底から本当に救われる思いをもちました。ひそかに家内と共に喜んだものです。それからの先生の順調な人生は、広く知られているとおりです。先生のご苦勞を偲ぶこの稿で、先生の裏面史を語るのは、ほんとうは慎むべきことかと思つたのですが、先生を語るのに、この悲痛なご体験を除外しては、後に続く人々が、人間としての大澤先生をただ表面的にみるだけで終わってしまい、もしそうだとしたら、それこそほんとうに学ぶべきものを除外することになり、それこそ申し訳ないことと考え直しました。先生はこのことを決してお怒りにはならず、「お手柔らかに！」と笑って受け入れていただけそうに思いました。

大澤先生と共に沢山の仕事をさせてもらいました。ほんとうに育ててもらったという感謝の心以外ありません。内田智雄先生に連れられて、大澤先生と三人で、京都祇園の夜をふらふらと迷ったこと。森鹿三先

生（京都大学人文科学研究所長）宅での原稿依頼のこと、廣池千九郎の最初の漢学の師である小川含章先生の孫に当たり、当時は東大教授で高名な脳の研究者・歴史学者であった小川鼎三先生との出会い。法制史家・利光三津夫教授のこと、思い出は限りなくあります。こうした諸先生とのつながりは、廣池博士生誕百年をお祝いするために、廣池博士の学問を再評価するためのものであります。

ちょうどこうした仕事有一段落したころ、私は、自分の専門の確立に向けて新しい世界を開こうと考え、米国留学を勤務先の麗澤大学に願い出ました。それは意外にもスムーズに受け入れられました。大澤先生も「君が留学を願い出ていたとは知らなかったので、驚いたよ。しかし大変喜ばしいことだと思った」と賛同していただきました。先生はこの時、「僕には専門というほどのものがないので、君には専門学を学び専門を通じてモラロジの大成に尽力してほしかったのだ」とも率直に語り、私を励ましていただきました。

米国滞在中に、倫理道德の研究センターをいくつか見る機会が与えられました。そこで私はほとんどはじめて、否、日本でもはじめてといっていくらい早い時期に、米国における専門職業倫理研究の急速な発展ぶりを体感しました。のちに生命倫理・死生学・終末期医療の領域に専門を定める決定的な機会になったことはいまでもありません。ちなみに、その調査旅行中に、私の後先になって同じような研究所を訪問しておられたのが、当時、生命倫理研究に打ち込んでおられた上智大学のホアン・マシア先生でした。私が米国における専門職業倫理研究の状況を論文で書いたところ、それをご覧になり、大変喜んでくださり、それ以降、上智大学との関係が深められました。

筆者の最初の本格的な著書となった『ケアの人間学』（ゆみる出版）には、大澤先生から早速、過分な評価をもらい、激励されました。のちに麗澤大学大学院比較文明文化専攻課程に教授として推薦された理由も、

同書にあります。

さらに筆者は地域貢献活動にも専念しましたが、それは表面に出ない地味な活動ですが、たまたま奥様が入院されたことで、地域医療・福祉活動の推進に尽力しているささやかな私の活動を知られることになりました。また私の母の葬儀を家族葬で行ったのですが、先生はいつの間にか、そつと葬儀に出てくださったのです。大変ありがたく感謝すると同時に、先生の実直な性格を物語るものと思います。

本年三月をもって私は麗澤大学を定年退職しました。先生が生きておられたら、「君もそんな年齢になるのか？」と驚かれたに違いありません。と同時に、廣池学に迫った筆者の新刊書『経国済民の学——日本のモラルサイエンス研究ノート』（麗澤大学出版会）の発行を喜ばれたであろうと想像しております。生前口頭ではお伝えしたのですが、穂積陳重博士と廣池千九郎の關係に深いものがあることを口にされてきました。それが先生との最後の会話となりました。

私は七〇歳になっても、とうてい先生の足元には及ばない、依然として未熟なままの一学徒にすぎません。ことに精神家としては、ただただ恥じ入るのみです。今後は先生の学問への情熱を引き継いでいって、自分の人生を全うする覚悟です。またあの世やらで、再会することでしょう。その時は、お酒を酌み交わしながら、何か新しいことを報告したいと考えています。